

令和2年を振り返り、令和3年に期待するもの

今年、令和2年の最大の事件は、何といたっても『武漢コロナ』感染でしょう。後世の人達は、スペイン風邪や、ペストに並ぶ歴史に残る疫病だったと言うでしょう。しかも、人工的に作られた可能性が高いことが重要です。

政治・経済に及ぼす影響は、二つの世界大戦、世界大恐慌にも匹敵するものです。

二十世紀初頭に、マルクスの唱えた社会主義を経て共産主義という経済システムは、ソ連という壮大な実験の失敗に終わりました。中華人民共和国も、同じ運命を辿るでしょうが、最後の悪あがきには注意する必要があります。

一方、アメリカ合衆国も、相対的に力が衰え、日本の周辺も、不安定な軍事的状況になって来ました。尖閣には、自衛隊を駐屯させる勇気ある政権であってほしいし、国民もそれ相当の覚悟が必要です。

さて、我々、中小企業の社長は、この事件・この時期を、どう考え、どう対処すればいいのでしょうか？

巷間言われる、「登り坂・下り坂・まさか」の、まさに「まさか」が、今です。

こういう時に、社長に求められるのは、まず“元気”です。“明るさ”です。“若さ”です。“粘り強さ”です。平常時のような、論理的だとか、合理的だとか、所謂、学校での優等生的な考えや行動は、全く役に立ちません。

何故なら、社員全員が、不安なのです、心配なのです。どうすればいいのかわからないのです。社員は、社長の発言や行動を、固唾を呑んで見守っているのです。

心配するな！我々の向かうべき方向は、こちらだ！一緒に、進んで行こう！と、社長が明るく笑顔で、社員全員をリードすることです。

安岡正篤先生が、『素心規』の中で、次のように教えて下さっています。

- * 困窮に処するほど快活にしよう。窮すれば通ずるものである。
- * 乱世ほど余裕が大切である。余裕は心を養うより生ずる、と。

そして、社長の若さは、決定的に大切なものです。社長が60代ならば、次世代にバトンタッチするチャンスです。おそらく、次世代は、30歳前後でしょう。親である社長は、次世代が、まだ若いと思い、ついつい先延ばししています。同業他社は、その間に、次世代に経営を移しているのです。又とない、このチャンスを逃さないことです。社長も、創業時は若かったのです。

百年に一回の、この大変化を、ピンチで終わらさず、大チャンスに変える勇気を持って下さい。私ども、中央総研も、今年、世代交代をしました。若い中央総研にご期待下さい。かつて、吉川英治が、結婚式で「菊根分け後は自分の土で咲け」とはなむけの言葉を贈ったそうです。私も、同じ心境です。



今月のポイント

人生は心がけと努力